



「てんかんは専門医のもとで根気強く治してほしい」と話す
徳島大学病院神経内科の梶龍兒科長＝同病院

てんかん治療に朗報

副作用少ない新薬相次ぐ

脳の神経の異常で、突然気を失うことのあるてんかん。国内では最近、副作用の少ない新治療薬が相次いで発売されている。てんかん治療に詳しい徳島大学病院神経内科の梶龍兒科長は、「てんかんの難治は治療すれば抑えられる。病気に対する偏見をなくすためにも、根気強く治してほしい」と話す。梶科長に新薬について聞いた。

徳島大学病院神経内科 梶科長に聞く

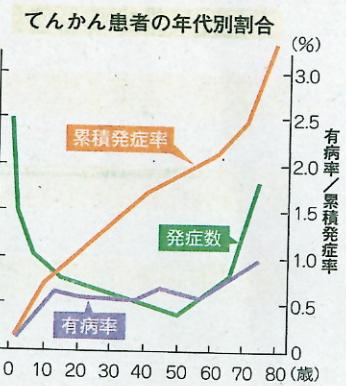
てんかんは、脳の神経細胞が過剰に興奮することで、手足のけいれんや顔面蒼白、意識不明、呼吸困難などの症状がある。全国で100万人の患者がいるといわれている。原因は、脳血管障害（全患者の約11%）や先天性減少（約8%）、外傷（約5%）など、脳に明らかな原因のある「症候性」もある。抗てんかん薬があつたが、これらは副作用が少ないとある。

日本では從来、4種類の薬が、原因不明のてんかん治療に使われてきている。新薬は、作用によって興奮する物質の働きを抑える「トピラミート」や、薬物を吸収すれば約8割の人には効果が消失する。専門医は手術が行われるが、主流は薬物治療で、抗てんかん薬を服用すれば約8割の人には効果がある。副作用を抑える動きを強める方には、副作用が少ないこと。従来の薬は、歯肉増加、多毛化、眠気、食欲低下、無気力など

の副作用があったが、それらが緩和され、服用の継続が容易になった。毎年十数人の新たな患者を扱う梶科長は、「副作用が少なくなったことで、患者のQOL（生活の質）は格段に向上了。正しく服薬すれば、患者の多くは普通の人と変わらないくらいの

が、原因の特定できない「特発性」が65・5%を占めている。新薬は、作用によって興奮する物質の働きを調整する「トピラミート」は手術が行われるが、主流は薬物治療で、抗てんかん薬を服用すれば約8割の人には効果がある。副作用を抑える動きを強める方には、副作用が少ないこと。従来の薬は、歯肉増加、多毛化、眠気、食欲低下、無気力など

の副作用があったが、それらが緩和され、服用の継続が容易になった。毎年十数人の新たな患者を扱う梶科長は、「副作用が少なくなったことで、患者のQOL（生活の質）は格段に向上了。正しく服薬すれば、患者の多くは普通の人と変わらないくらいの



服用継続も容易

日常生活を送ることができると言う。

同年4月、栃木県でクレ

ーン車を運転中に発作を起

てんかんは3歳以下で最も多く発症するが、脳血管障害を原因とする高齢者の発症率も高い。2010年の国勢調査で高齢化率（人口に占める65歳以上の割合）が25.9%、全国で8番目に高い徳島県で、新薬の登場は朗報だ。

2011年には、栃木県や広島県などで、自動車を運転中の発作による交通事故が起き、疲労や深酒、睡眠不足で、副作用を気にせず安心して服用できるようになつた。発作を起さないため梶科長は「症状を抑えれば自動車の運転も問題はない」と強調し、周囲への理解を訴える。

（棚上泰雅）